

麦わら・稲わら・もみ殻は 有機物資源として利用しましょう！

麦わら・稲わら・もみ殻などの農作物に由来する有機物は、田畑の土づくりに有効な資源です。

田畑へすき込むことで、排水性・保水性・保肥力を高めることができます。



麦わら

◇水稲作への

すき込み利用

- ①田植時の障害となる“浮わら”を防ぐため、麦わらは長め(15cm程度)にカットしましょう。
- ②荒おこしは、作業速度を遅く・できるだけ深く行い、麦わらと土が良く混ざるように行いましょう。
(深耕ロータリーを利用することで、より効率的にすき込み作業ができます。)
- ③代かきの2日くらい前に入水し、麦わらに十分水を含ませた状態で代かき作業を行いましょう。
- ④代かきは、土が7、8割程度見える極浅水の状態で、ロータリーを低速に設定して練り込むように行いましょう。(ロータリーが高速の場合、浮わらの原因となります。)
- ⑤田植後に“ワキ(ガスの発生)”が激しい場合は、除草剤散布7日後に「田干し」を行いガス抜きを行うなど、水管理を徹底しましょう。

◇敷わらや堆肥としての利用

未カット(長わらの状態)で、果樹や野菜の敷わら・堆肥の原料として有効利用ができます。

稲わら・もみ殻



◆麦、野菜作へのすき込み利用

- ①稲刈り終了後、なるべく早くすき込みましょう。
土壌中の微生物の活動が活発な状態(地温15℃以上が確保できる時期)の10月20日頃までに行いましょう。
- ②すき込みは5～10cm程度の浅耕としましょう。
作業効率と併せて腐熟促進のために浅耕によるすき込みを心がけましょう。なお、すき込み時に石灰窒素(10a当たり10～15kg)などの腐熟促進剤を施用することでより効果的に活用できます。
(腐熟促進剤を利用する場合には、説明書に従い適切に使用してください。)

◆畜産の粗飼料や敷わら、 堆肥としての利用

- 繁殖牛や飼育牛の粗飼料・敷料、果樹・野菜の敷わら、又は堆肥の原料としても有効利用できます。

